

## 審査の結果の要旨

氏名 信吉 真璃奈

自閉スペクトラム症 (ASD) は、“対人コミュニケーション”と“こだわり”を特徴とする神経発達障害である。従来は認知機能を中心に障害理解がされていたが、それだけでは感覚過敏を含めた自閉スペクトラム症の全体を理解するには限界があった。そこで、本論文では、ASD に対する従来の認知的アプローチを補足するものとして感覚に注目し、感覚刺激をフィルタリングする感覚ゲートの機能に関して研究することを目的とした。論文は、問題意識と研究構成を明らかにする第1部、感覚が生活に及ぼす影響を明らかにする第2部、感覚ゲートの測定尺度を作成する第3部、ASDの感覚ゲート異常が生活・感情に与える影響を検討する第4部、総合的考察と今後の課題を示す第5部から構成される。

第1部1章で先行研究レビューによって、心の理論、実行機能、中枢性統合といった認知機能に基づくASDの理解と支援には限界があることを示し、感覚に注目する意義を明らかにした。それを受けて2章で研究の目的と論文構成を示した。

第2部3章では感覚が個人に与える影響を分析する手がかりとして共感覚に注目し、定型発達の共感覚者8名に半構造化面接を行い、グラウンデッド・セオリー・アプローチ (GTA) による質的分析の結果、感覚によって実生活も対人関係も影響を受けることが明らかになった。4章ではASDの共感覚者3名に半構造化面接を行い、GTAによる質的分析の結果、ASDは定型発達より困り感が強く、感覚に注目する意義が示唆された。そこで、5章ではASD者14名に半構造化面接を行い、GTAによる質的分析の結果、感覚過敏と感覚ゲート異常による困り感は、疲れなどの“身体状態の分かりにくさ”と“言語化の難しさ”と結びついていることが明らかとなった。

第3部6章では感覚ゲートの異常を質問紙で測定可能にするために日本語版感覚ゲート尺度の標準化を行った。7章では日本語版感覚ゲート尺度をASD者59名と定型発達50名に実施し、カットオフ値 (122点) を算出し、感覚過敏よりも感覚ゲートのほうが定型発達との弁別をしやすいことを明らかにした。8章では日本語版感覚ゲート尺度をASD者49名、定型発達50名、トゥレット症患者19名に実施した結果、重症度はASDが最も重く、次にトゥレット症で、定型発達が最も軽いことが明らかになった。9章では、8章と同じ研究協力者を対象にして感覚ゲート異常とQOL低下の関連性を量的に分析したところ、定型発達のみで感覚ゲートがQOLを予測するとの結果がみられた。10章ではASD者50名、定型発達50名、トゥレット症患者19名において感覚ゲートの自己の感情認知への影響を検討したところ、ASDと定型発達では感覚ゲート異常が、トゥレット症では感覚過敏が感情同定困難を予測することが示された。第5部11章で知見をまとめ、12章で意義を総括した。

本論文は、これまでASD理解において見過ごされていた感覚の機能に注目し、共感覚、感覚過敏、感覚ゲート異常がASD者に及ぼす影響を明らかにした点、さらに日本語版感覚ゲート尺度を標準化し、定型発達やトゥレット症との比較を通してASDの感覚ゲート異常の影響の特徴を明らかにした点で特に意義が認められる。よって、本論文は、博士 (教育学) の学位を授与するに相応しいものと判断された。